

『今鏡』「作り物語の行方」の意味

——「打聞」巻における位置づけから——

陳 文 瑤

はじめに

『今鏡』の最後に「作り物語の行方」と題する章があり、ある人の『源氏物語』作者の供養を望むという発言を契機とし、紫式部墮獄説に対する老嫗の反論を通して、『源氏物語』に対する独自の評価が展開されている。

早い時期に則保洋菜氏はこの「作り物語の行方」に注目し、『今鏡』作者の文芸思想について論じた。同氏は、『今鏡』作者は「仏の方便」の視点によって『源氏物語』の「罪」を救ったと言えるが、反面、その考えは仏教的善悪の物差しでのみ作品を判断する限界にもつながったと論じている。則保氏のこうしたやや消極的な『今鏡』評価に対して、海野泰男氏は、文学を狂言綺語とする当時の風潮の中にあつて「虚構の世界の意義をとまかくも承認しているところ」は積極的に評価すべきであると主張している。また、『今鏡』の序には語り手を紫式部の侍女として設定し、作品の

中にも度々『源氏物語』の字句を引用、さらに最後の章を『源氏物語』論で締めくくっているなどの点から、『今鏡』作者の『源氏物語』に対する傾倒は深いと指摘されることが多い³⁾。従来は「作り物語の行方」という『今鏡』の一部分をとりあげ、『源氏物語』論乃至は文学思想論という視点からそれを捉えるのがもっぱらであったが、「打聞」巻から切り離し、単独に論じてきた感がある。確かに『源氏物語』に対する尊敬から、『源氏物語』についての話題が作品の最後にも述べられたといえようが、なぜ紫式部墮地獄説という伝説が述べられないといけないのか。これは『源氏物語』に対する尊敬と憧れだけでは十分に説明できないと思う。本稿では「打聞」という巻の性質に注目し、「打聞」巻の最後に位置する「作り物語の行方」の意味を一試案として提示してみようと思う。

一 「作り物語の行方」と源氏供養の流れ

1、「作り物語の行方」

「作り物語の行方」は「またありし人」の発言として、『源氏物語』は事実でないこと、あだめいたこと等を書いてあるので、作者の紫式部はあの世で焦熱地獄に堕ちて苦患を受けていると、所謂紫式部墮地獄説を述べる。そして、それを救うために紫式部の供養をしたいとの希望を述べる。全体の展開は次のように整理することができる。

①ある人、『源氏物語』作者の供養を望む³⁾

②老嫗、『源氏物語』綺語説を否定、仏法に導くための方便と説く

紫式部隨獄説に対する反論の内容は、i. 『源氏物語』は「妄語」「虚言」ではないと主張し、読者の心を動かし、愚かな人の心を導く文学の意義を説く。ii. 殺生や偷盜ほどの深い罪ではないので、奈落の地獄に沈むほどの罪ではない。更に、一步進んで、白楽天は言葉の技巧と譬喩によつて人の心を仏法に導き、文殊の化身とも言われるし、仏にも譬喩経という事実でないことを作り出して説いている。『源氏物語』も人の心を仏法に導くための譬喩方便と考える。そして、女の身で『源氏物語』のような優れたものを創作するのは、並大抵のことではなく、妙音菩薩や観音菩薩の例をあげて、紫式部はただ人ではなく、菩薩の化身であるかもしれないと暗示して、仏、文殊の化身と言われる白楽天と同等化しようとする。

③供の女童、男女の物語にて御法にあらざると反論

④老嫗、人を仏道に勧める面があると反論

女童の反論を挟みながら、更に『源氏物語』は六十巻という長編にしては少しもいい加減なところも至らないところもないこと、今も昔も帝后をはじめとする身分の高い人々が賞翫し宝物としていることから、この物語の比類のないすばらしさを語る。そしてこれを賞翫することぐらひは深い罪にはならないと主張する。更に重ねて、『源氏物語』は人間の罪深い様、心遣いのある様、世のはかない様を見せて、人々をして仏道に勧める面があると説く。

である。

⑤老嫗、仏道に勧める面を実証し、そして結論へ

次に『源氏物語』の中から具体例を四つ挙げ、『源氏物語』の描くものは、「ひとへに、男女のこののみやは侍る。」と実証している。続いて世親菩薩の言葉を傍証にし、『源氏物語』を読むことは、ものの心をよく知り、惑いから悟りの道に向かうことでもある。すなわち、仏の御法を世に広める機縁となるものであると説く。仮に『源氏物語』が荒唐無稽な言葉であり、喃語であつたとしても、それは畢竟は仏の教えに繋るものだというのである。

2、源氏供養の流れ

『源氏物語』は、紫式部が執筆した当時からすでに貴族の間で評判になつていた。和歌・作文・管弦の道に秀でた藤原公任、『更級日記』の作者孝標の女まで、『源氏物語』を愛読していた。『今鏡』でも

物語などいひて、一卷二巻の書にもあらず、六十帖などまで作り給へる書の、少しあだにかたはなることもなくて、今も昔も、賞で翫び、帝后よりはじめて、えならず書き持ち給ひて、御宝物とし給ふなどするも、(下・五二六頁)

と、宮廷における『源氏物語』の衰えを知らない人気が何え

る。しかし一方、『源氏物語』の作者紫式部が『源氏物語』を書いた

ために地獄に墮ちてしまった話、またはその読者も賞翫することによって同様な罪を得るといふ説は平安朝末期から巷間に広まっていた。

紫式部墮獄説については、『源氏一品経』（澄憲作と言われる）と『今鏡』とのどちらがより早く書かれたかが問題で両作品の成立年代の問題にもかわるが、いずれにせよ『今鏡』に語られる紫式部墮獄説は『源氏物語』伝説の流れの中でも早い時期だと言われている。これら二つの作品の内容から伺えるのは、明らかに仏教の立場に立って、物語は根も葉もない虚構を作り出して男女の話語ることで人々を迷わせる故に物語というのには悪書だという認識なのである。

こうした物語を悪書とみる考えは、すでに平安中期の頃に現れていた。有名な話であるが、『更級日記』の作者孝標の女は、子供の頃から物語に憧れ、上総の国から都に出てやつと『源氏物語』全巻を入手した。日夜読みふけていと、夜、黄色地の袈裟を着た高僧が現れ、「法華経五の巻をとく習へ」と警告する夢をみたという。その後結婚してまもなくの頃、彼女は、

多くの年月を、いたづらにて臥し起きしに、おこなひをも物語でもせざりけむ。このあらしごとども、思ひしことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇治にかくし据ゑたまふべきもなき世なり。あなものをぐるほし。いかに、

よしなかりける心なり、と思ひしみて、(三二九頁)

と、自分が長い年月仏事に関わることなくむだに過こし、物語に毒されてきたことが悔まれるのである。物語耽溺に罪悪を感じるような思想が、鎌倉初期になって、紫式部墮獄説の発生に結びついたと伊井春樹氏は指摘している。

『今鏡』より後に書かれた『宝物集』『今物語』『新勅撰和歌集』などの書物では、地獄に墮ちた紫式部を供養する様子が語られている。紫式部供養（源氏供養）の流れに関しては伊井氏の論考⁽⁷⁾に詳しいので、詳述しないが、留意したいのは『権中納言実材卿母集』や『紫式部の巻』など、紫式部を観音菩薩の化身と見なす資料である。

『今鏡』で紫式部墮獄説への反論の一つとして挙げているのは、紫式部観音菩薩の化身説である。『無名草子』でも「凡夫のしわざともおぼえぬことなり」と、このようなすばらしい物語を作れたのは紫式部がただ人ではないからだという。『権中納言実材卿母集』(一二八七年までに成立)一四一番歌の詞書き「源氏のものがたりをあさ夕見侍りしころ、むらさきしきぶを夢に見侍りて、かの菩薩のために、法花経供養せさせなどして、講おこなひ侍りし時」では「かの菩薩」と呼んで、紫式部を菩薩と見なそうとしている。時代が下って、室町末期の『玉葉集』や御伽草子『紫式部の巻』などの資料でも紫式部を観音菩薩の化身と見なす記述が見られる。更に、『原中最秘抄』下の巻末に「或は作者観音の化身とも云り」

とし、『河海抄』巻第一にも「或又作者観音化身也」と、『源氏物語』の古注釈書にもこの説が継承されていくのである。紫式部を供養することより式部を観音菩薩の化身として昇華させている。こうした流れから考えると『今鏡』が早い時期に源氏供養に言及し、紫式部の観音菩薩化身説を打ち出す点が興味深いのである。

二 歌学書としての「打聞」巻

さて、『今鏡』の最後にある「作り物語の行方」は、一体何を意味しているのだろうか。ここで「打聞」巻の配列を見てみよう。

「打聞」巻には「敷島の打聞」、「奈良の御代」、そして「作り物語の行方」という三つの章段が含まれている。「敷島の打聞」では和歌に関する話が盛りだくさん述べられている。源頼実が命に換えても名歌ができるよう神に折った話、若い頃の頼綱が、自分がつれなくした女の歌に感動して、ふたたびその女を愛するようになった話と、頼綱の歌人としての自負心とその秀歌、小大進が詠歌によって夫光清と復縁した話と、さらにそれに関連して、大臣家の女房であった小大進が筑紫の母のことを案じていたが、折しも、大臣のたつての頼みで五節の童女として出て、熊野参詣の願いを果たし、帰路、光清に見せられて妻となり、筑紫の母を都に迎えることができたという話も語られている。五月の節句に菖蒲のかわりに花かつみを葺く陸奥国の風習の由来についての話と辺境の陸奥の地で客死した実方が、蔵人頭になれなかつた怨念の為に

雀となつて、殿上の台盤の物を啄んでいるという話、二つ実方中将に関する話、右近の馬場で真手番が行われたおりの、重通と女車の主との連歌について語るついでに「日をりの日」についての考証もあり、周防内侍が家を人手に渡して他所へ行く時の歌、訴訟のために蔵人頭雅兼を訪れた琳賢が歌を誉れられて、あまりのうれしさに訴えることをやめ、早々に退出した話、菩提樹院の池の蓮に万葉集歌「鶯の卵の中のとぎす」を実際に見る話など。これらの話は『袋草紙』、『無名抄』、『今物語』、『続古事談』、『江談抄』などの歌書や説話集に類話を持つているものが多い。

いったいに歌論や歌学書は、和歌の本質、表現、歌風、歌人論など、様々な内容を擁し、それらが混在したものも多く、中には歌人や和歌に関する逸話なども含まれる。「敷島の打聞」を見ると、特定歌の詠歌事情、歌徳説話、和歌に関する故事などを書きとめ、その名の通りに歌学書のようなものになっている。このような歌学的性質は、次の段「奈良の御代」ではより明らかに現れている。

「奈良の御代」では冒頭に「この中の人の、おぼつかなき事ついでに申さむ」とある。聴衆が日頃疑問に思ってきたことをこの際、博識の語り手に聞くというのである。聴衆の中のある人が古今の序に、「かのおほむ時、正三位柿本の人丸なむ、歌の聖なりける」とあるに、かの人丸は、かの御時より昔の歌詠みと見ゆるを。万葉集作れる時より古今撰ばれたる時まで、

「年は百年あまり、世は十代」とあれば、十代といはば、大
同の御代ときこゆるに、百年あまりといふは、さきの事とき
こゆる上に、人丸は上りたる世の人と見えれば、えなむあ
るまじき。(下・四九八〜四九九頁)

と、『古今集』「仮名序」の矛盾を問題提起とし、『万葉集』の成立
時期についての論に入っている。老嫗は、①奈良の帝というのは
平城天皇だけではないこと、②人麻呂は奈良朝にも生存のこと、
二点から論を展開している。老嫗の論を受けて、ある人が更に

古今の序に、「いにしへより、かく伝はるうちに、ならの御時
よりぞ広まりける、かの御代や、歌の心をしろしめしたりけ
む、かの御時、人丸なむ歌の聖なりける、かかりけるさきの
歌をあはせてなむ、万葉集と名づけられたりける」と書ける
は、人丸が世に撰ばれたるやうにこそはきこゆれ。(下・五一
一頁)

と、さらに疑義を呈したところ、老嫗は『古今集』「仮名序」の解
釈を提示し、奈良の帝の一代だけでは無い証拠をもう一度出して
いるが、聴衆の中の質問者は

それは、たちまちに定めえがたく侍なり。またこのついでに
尋ね申さむ(下・五一四頁)

といて、この『万葉集』成立論についての話題を一旦打ち切る
ことにし、最後に憶良の『万葉集』撰定説についての話で「奈良
の御代」という一章を閉じている。和歌に関する歴史的、注積的

言及となつてゐる一章といえよう。このようにみれば、「敷島の打
聞」と「奈良の御代」の二章段は、歌学書的な性格を持つてゐる
と考えられる。¹⁾

前の二章段の性格から考えると、先行論のように「作り物語の
行方」だけを物語論として論じるのは、「打聞」という巻または『今
鏡』という作品を解説していく上で大事な点を読み落とすことに
繋がると思われる。

ここで注目したのは「奈良の御代」の冒頭で「この中の人の、
おぼつかなき事ついでに申さむ」と述べる点で、こうした話題転
換から見ると、「敷島の打聞」の話を承けていると考えた方
が自然であろう。同じ話題転換の方法は「奈良の御代」の最後に
も「それは、たちまちに定めえがたく侍なり。またこのついでに
尋ね申さむ」とあるところに見える。「作り物語の行方」の冒頭に
「またありし人の」という、発言者は、前段の質疑者と同一人物
と考えられ、話の流れが繋がつていてと考えてもよいであろう。
そして、「敷島の打聞」と「奈良の御代」はいずれも和歌にまつわ
る話題の章段で、歌学書の性格を持つてゐるということから考え
ると、同じ「打聞」巻のもう一つの章段「作り物語の行方」も歌
学書寄りの性格を持つてゐる乃至は歌人の視点からの発想が入つ
ていることは考えられないであろうか。

三 源氏供養と歌人たち

1、歌人たちとのかわり

源氏供養は歌人たちとのかわりがどのようなものなのであるう。『宝物集』巻四では「歌詠みども」による源氏供養が伺われる。

また『今鏡』の作者とされている為経（寂超）の子隆信の歌集『隆信集』にも見られ、隆信の子の信実の作とされる『今物語』第三十八では、『源氏物語』の巻名を冒頭に置き、「なもあみだ仏」の句を詠み込む歌を作る源氏供養がなされたことも記されている。

『新勅撰和歌集』巻十釈教歌の宗家の歌とその詞書き、などにも柴式部のために供養した実態を伺うことができる。源氏供養には歌人がしばしば登場することが、これらの資料によってわかる。

また、為経（寂超）周辺の源氏供養の資料が目立ち、密接なつながりがある話の伝播経路として、先行研究によって注目されている。

院政期から鎌倉期にかけて、『源氏物語』の享受層はその大半が歌人によって占められるようになったという。『六百番歌合』に、藤原俊成の「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」という有名な判詞がある。俊成のことは、当時およびその後の歌壇に大きな影響を与えたのは周知の通りである。歌人にとって、『源氏物語』を読むことは不可欠な教養になっていく。このように『源氏物語』が歌人にとって必須の読み物とされる一方、柴式部の墮獄と『源氏物語』の悪書説が蔓延したのだから、歌人にとっては大きな衝撃になったのであろう。源氏供養は正しくこのような時代背景の産物

といえる。歌人たちが、世間に広まる柴式部の墮獄説に対抗し、源氏供養を行う。

2、和歌と狂言綺語

『源氏物語』を悪書と見なすのは、仏教の立場から狂言綺語と考えることが背景にあると思われる。

「狂言綺語」は偽り修飾したことをいう。仏教には十惡として厳しく禁じられている。一方、文学の本質には虚構と修飾という二つの属性を擁していると思われる。そしてそれを否定する仏教とは元々相反するものであるため、仏教の立場からみると、文学は「狂言綺語」と考えられていた。が、その相反性を和らげるのは康保元（九六四）年以来、慶滋保胤が中心となる漢詩人たちによって行われた勸学会なのである。源為憲の『三宝絵』では大学北堂の学生と叡山の僧各二十人が、春秋二回寺に会し、『法華経』を講じ、念仏し、讚仏讚法の詩を作って寺に納めるなど、会を始めた由来とその活動ぶりが記されている。⁹¹⁾

こうした考え方は漢詩人たちから歌人たちに受け継がれてゆく。そうした様相の一端は『栄花物語』巻第十五「うたがひ」

月の夜、花の朝には、物の音を吹き合せ調べ、殿ばら僧たち、
経の中の心を歌に詠み、文に作らせたまふ、あるは「百千万劫の菩提の種、八十三年功德の林」、また、「願はくは今生世俗の文字の業、狂言綺語の誤をもて、かへして当来世世讚仏

乗の因、転法輪の縁とせん」など、誦じたまふも尊くおもしろし。

に見られる。漢詩文と同様、和歌を狂言綺語と見なすことは、『袋草紙』上巻・雑談の「恵心僧都は、和歌は狂言綺語なりとて読み給はざりける」という記述からも伺える。和歌を狂言綺語と斥けた恵心僧都が

恵心院にて曙に水うみを眺望し給ふに、沖より舟の行くを見
て、ある人の、「こぎゆく舟のあとの白浪」と云ふ歌を詠じけ
るを聞きて、めで給ひて、和歌は観念の助縁と成り

と思ひ至り、歌を詠むようになったという。これもまた和歌を仏教と関連づけようとする一例である。

前述した『源氏物語』にまつわる紫式部墮獄説と紫式部観音化身説は、いずれもその根底にこのような狂言綺語に関する考え方がありと思われる。「作り物語の行方」が『源氏物語』に対する尊敬及び憧れの故に書かれたという点については否めないが、文学が狂言綺語とみなされる中で、これを正当化しようとする歌人としての思いが入っていたといえよう。

おわりに―「打聞」巻での位置付け

さて、「作り物語の行方」に話を戻す。『源氏物語』への尊敬と憧れなら、『源氏物語』本論が語られてもいいのに、「作り物語の行方」（紫式部墮獄説に対して『源氏物語』を評価してこれに反対

する論）が語られる必然性は、以上のように見てきた源氏供養と歌人たちの関わり、または狂言綺語に関する考え方との関わりを考え合わせると、うなずくことができるであろう。またこの章を「打聞」巻に置く理由も浮かんでくると思う。有力の証拠が欠けているため、「作り物語の行方」を歌学書と認定するには難しいが、大体歌学書寄りの性格を持っていると言つてもよいであろう。同じく文学としての『源氏物語』を狂言綺語による悪書説から救い上げたのは、歌人としての思いが「作り物語の行方」を「打聞」巻に入れたことと相即の関係にあったと考えられるのである。

〔注〕

(1) 則保洋栄 「今鏡の文学論」 (檀蔭文学) 九号、昭32。

なお、松村博司著 『歴史物語』(瑞書房、昭36) で松村氏は、「作り物語の行方」を『源氏物語』観」として考え、作者の文芸思想の現れと考える。

(2) 海野泰男 『今鏡』の源氏物語論―「作り物語のゆくへ」について (『常葉国文』六号、昭56・6)

(3) 「作り物語の行方」についての先行論はほとんど、『今鏡』には『源氏物語』に対する尊敬及び憧れの念が首尾一貫しており、それは殊に「序」と「作り物語の行方」に現れていると指摘している。

(4) 「作り物語の行方」の展開構成について、先行論では大差が

ない。それらに基づいて私なりに整理する。

(5) 『源氏物語』の享受については、伊井春樹氏の『源氏物語の伝説』(昭和出版、昭51)に詳しい。

(6) 同注5。

(7) 多くの先行論ではこれらの書物を指摘している。

(8) 同注5。

(9) それぞれの話の類話については、海野泰男氏の『今鏡全釈』

(福武書店、昭58)、後藤祥子「今鏡の和歌」(歴史物語講座第四卷『今鏡』(風間書房、平9))などに指摘がある。

(10) 後藤祥子「今鏡の和歌」(歴史物語講座第四卷『今鏡』(風間書房、平9))では「打聞」巻の歌学書としての性格を指摘していたが、「作り物語の行方」が含まれていない。

(11) 「狂言綺語」に関する思想やその全体の流れについては、中川徳之助氏「勸学会—狂言綺語観の展開(1)—」、「詩・酒・佛—狂言綺語観の展開(2)—」、「三つの夢—狂言綺語観の展開(3)—」(『国文学攷』14、15、17号、昭30、32)など、数多くの論考がある。

※本文の引用は、『今鏡』(海野泰男氏の『今鏡全釈』(福武書店、昭58))、『更級日記』(新編日本古典文学全集『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』(小学館、平6))、『無名草子』(新編日本古典文学全集『松浦宮物語・無名草子』(小

学館、平11))『権中納言実材卿母集』(『新編国歌大観』(角川書店))『原中最秘抄』(『源氏物語大成』「研究・資料篇」(中央公論社、昭31))『河海抄』(『紫明抄・河海抄』(角川書店、昭43))『六百番歌合』(新日本古典文学大系『袋草紙』(岩波書店、平10))『栄花物語』(新編日本古典文学全集『栄花物語』(小学館、平7))、『袋草紙』(新日本古典文学大系『袋草紙』(岩波書店、平7))による。

——チエン・ウエンヤオ、広島大学大学院博士課程後期在学——